

# 江戸前期における生きた漢語の摂取に対する林家の姿勢

## —寛文期を中心に—

朱 全 安

### I はじめに

林羅山を開祖とし、漢学研究をその存在の根幹とする林家塾にとって、寛文年間（1661年—1673年）は、第二代当主林鷺峰による弘文学院学士称号の獲得、「忍岡家塾規式」の制定、『本朝編年録』の続撰、老中（後に大老）酒井忠清をはじめとする徳川政権中枢の権力者たちとのコネクションの維持、徳川光圀・保科正之・前田綱紀など有力大名との親密な関係の構築など、林家塾が大いに発展した重要な時期であった。

一方、東アジアの情勢をみると、中国では明朝が1644年の北京陥落により翌1645年にかけて滅び、清が北京に入城して以降、江南地方は明清交替の戦乱期に入っていた。明の再興のために戦っていた明の遺民で知識人の朱舜水（1600年—1682年）は、1659年に鄭成功が率いた南京攻略（北征）が失敗に終わった後、日本の長崎に亡命した<sup>(1)</sup>。

寛文五年（1665年）七月、朱舜水は水戸藩主徳川光圀の招聘を受け、江戸に到着した。

「鎖国」状態にあった日本において、寛文期は、幕府の政治が徳川家康・秀忠・家光と三代続いた武断政治から、第四代将軍徳川家綱による文治政治へと漸く転換していく時期であった。徳川政権の所在地である江戸において、漢学者や、漢学に興味をもつ大名たち、とりわけ儒学の研究・教授によって身を立てていた林家の人々が、いかなる姿勢で朱舜水に接したのか、さらに、彼が話すことば—生きた漢語<sup>(2)</sup>—に対して、いかなる反応を示したのかは、実に興味深い問題であり、いわば、林家の人々の漢語に対する姿勢を明らかにすることにより、彼らがいかなる意識で漢学を研究・教授していたかを知る手がかりを得ることができよう。

本稿は、林家の人々が、朱舜水および彼が話す言語—生きた漢語—に対してとった姿勢を浮き彫りにするため、それと対照をなす林家周辺の漢学者、例えば林鷺峰の友人である人見友元や木下順庵、さらには林家と親しく付き合っていた好学の大名、例えば水戸藩主徳川光圀・小城藩主<sup>(3)</sup>鍋島直能・加賀藩主前田綱紀などが朱舜水および漢語に対して示した反応について論じる。

(1) 石原道博『朱舜水』、吉川弘文館、1961年、70頁—95頁参照。

(2) 江戸時代、中国語の口語は、唐話・華音などと呼ばれていたが、本稿では「漢語」を用いて、中国語（口語・文語）を表すこととする。

(3) 伊藤昭弘「成立期の小城藩について」（『成立期の小城藩と藩主たち』、佐賀大学地域学歴史文化研究センター、2006年）によれば、小城「藩」という呼び方が適切かどうかについて議論があるようであるが、本稿では「小城藩」という一般的な呼称を用いる。

## II 林鷺峰と朱舜水の弟子たちによる中国音読

### 1 下川三省の中国音読を聞く

#### (1) 下川三省との初見

林鷺峰は寛文七年（1667年）八月七日、小城藩主鍋島直能の邸宅を訪ねた際、偶然にも朱舜水の弟子と出会い、彼に中国音で詩を詠わせている。その光景について、以下のように記している。

……依約赴鍋島加賀守，謝參府以來懇問，而互語去年以來往事，及午半友元來會，……未刻藤勿齋來，……於是羞晚炊，其後主客共到咸臨閣，觀庭前山水，往年遊于此，依主人之請名閣曰咸臨，余作之記，庭有曲水細流，名之曰蟠龍泉，泉傍有岡有林，啼鳥來集，故名園曰鳥止，友元作記，余輩與主人相識，是勿齋爲媒，今日之會，庭之景依舊，所伴不異，唯欠春信耳，今日各懷舊者屢矣，座有一書生，歲十八九，其名曰三省忘其氏，是主人家僕之子，常侍朱之瑜，在水戶邸者也，聞習詩經於之瑜，試問之則以明音誦關雎詩，……<sup>(4)</sup>

上記の文章の大意は、以下の通りである。

鷺峰は鍋島直能の招待をうけ、約束通りに小城藩邸を訪ねると、直能が小城から江戸へ参勤に来て以来、自分に対して示してきた懇切な表敬に感謝のことは述べた。それから、各々昨年来の事を話し、午後一時、友元が来た。……午後二時、加藤勿齋が来て、そこで食事をし、それから直能と客たちは咸臨閣へと行き、庭にある山水を観覧した。以前ここを遊覧したとき、主人（直能）の求めに応じて書院を咸臨閣と名付け、私とその記を書いた。庭には小川が曲がりくねって流れており、その小川は蟠龍泉と名付けられた。蟠龍泉の傍には岡と林があり、啼く鳥が集まってくる。それゆえ庭園を鳥止園と呼び、友元がその記を作った。私たち（鷺峰と友元）が主人（直能）と知り合ったのは、勿齋の紹介であり、今日の訪問で、庭園の景色は以前と同じように美しいのだが、同伴する人間が異なり、ただひとり春信がない。今日は皆それぞれ昔の事を幾度となく追憶した。庭園のすわる場所にひとりの書生がおり、歳は十八、十九で、名前を三省と言い（彼の姓は忘れた）、主人の従僕の子であり、よく朱之瑜に仕え、水戸藩邸にいる者である。彼が朱之瑜に詩経を習っていることを聞き、試しに質問したところ、彼は中国音で関雎の詩を朗吟した。

寛文七年（1667年）八月は、鷺峰が幕府の命で『本朝編年録』の続編を編修している最中であり、以上の記述は、鷺峰が書いた日記『国史館日録』に記されていることから、偶然に出会った三省が中国音で詩を詠じたことが、鷺峰にとって、いかに印象深かったかを物語っている。

文中に出てきた三省の師、朱之瑜とは、すなわち朱舜水であり、之瑜は名、舜水は号である。水戸藩主徳川光圀の招聘をうけて江戸に来て、寛文八年（1668年）二月に光圀が朱

(4) 林鷺峰著、山本武夫校訂『国史館日録』第二、続群書類従完成会、1998年、寛文七年八月七日の項、158頁—159頁。

舜水のために新築した駒籠の別邸に入居する以前<sup>(5)</sup>、鶯峰の日記によれば、舜水は江戸の水戸藩邸に住んでいた<sup>(6)</sup>。実は、光圀は寛文七年七月中旬から翌年二月末まで水戸藩に就藩し、朱舜水もこれに合わせ、寛文七年八月から翌年二月末まで水戸に滞在していた<sup>(7)</sup>。すなわち、鶯峰が鍋島邸で三省に出会うことができたのも、三省が朱舜水の水戸行に随行しなかったため、普段のように朱舜水の傍に近侍する必要がなくなり、自身が所属する小城藩邸に戻って来ていたからであろう。

鶯峰が哀惜の念を込めてその場にいないことを嘆いた春信とは、鶯峰の長男であり、父と同じく儒学者で幕府の編史の仕事に参加していた。春信の号は梅洞であり、文才が高く、寛文三年（1663年）冬に書院の庭園にある小川を題して、「蟠龍泉歌」を作り、直能に贈っている<sup>(8)</sup>。しかし、梅洞は寛文六年九月、若くして亡くなった。

ちなみに、林鶯峰が訪ねた鍋島直能邸は品川の先、大井村浜川にあり、敷地は六千三百二十坪、万治二年（1659年）六月に小城藩の江戸下屋敷として購入したもので<sup>(9)</sup>、延宝三年（1675年）七月に売却したものであった。屋敷の様子は次のように記録されている。

右之御屋鋪ハ万治二年之夏御求被成候而、寛文に至り漸々池館御取立有、御書院を咸臨閣と命せられ、御泉水を蟠龍泉と御名付、其向へに大有石有、側に舟石と号するも有、又猗々たる緑竹の林有を鳥止園と被号、……雪月花の折にふれてハ文人詩客を御招請有、和漢の詠吟述作数篇に及へるを、皆巻軸に御仕立被置候、……朝觀御閑暇之節ハ御逍遥御保養の地と被遊候処、薫山の御別業御經營ニ付而御払ニ相成候也、…  
…<sup>(10)</sup>

なお、鶯峰が鍋島直能の書院のために書いた「咸臨閣記」は寛文三年（1663年）秋の作である<sup>(11)</sup>。

同日、書院に同席した人見友元は鶯峰と同様、幕府の儒者であり、鶯峰とともに編史事業に携わっている。加藤勿斎とは石見吉永藩主加藤明友であり、漢学についても造詣が深かった。二人とも鶯峰との付き合いは親密であった。

## (2) 下川三省の漢語学習の経緯

林鶯峰が鍋島直能邸で思いがけず出会った中国音のできる青年は下川三省であった。鶯峰の日記に記されているように、下川三省の父親は小城藩主直能に仕える僕であった。なぜ三省が朱舜水について学問を学ぶ機会に恵まれたのか、どのように学習していたのか、

(5) 『朱舜水』、143頁—145頁。

(6) 前掲注(4)参照。

(7) 鈴木暎一『徳川光圀』、吉川弘文館、2006年、119頁。

(8) 「直能公御年譜」五、延宝三年の項。

(9) 小城藩浜川屋敷の購入の件について、「直能公御年譜」三、万治二年の項にその詳細及び「売券状之写」が見える。但し、次の一文「右濱川御下屋敷之義、是より十七ヶ年之後、延宝三年ニ佐久間備中守殿ヲ御所望ニ付、御払ニ相成候、手形有」も併記されている。

(10) 「直能公御年譜」五、延宝三年の項。

(11) 林鶯峰「咸臨閣記」、『鶯峰先生林學士文集』巻之五、林鶯峰著、日野龍夫編『鶯峰林學士文集』上、ペリカン社、1997年、102頁—103頁。

上級家臣の出身ではない三省にとって、朱舜水の指導の下で学んだ本格的な漢学、とりわけ「鎖国」状態にあった江戸において、生きた漢語が学問のみならず日常生活において用いられるという極めて珍しい言語環境の中で習熟した漢語について、その後、身分社会の中で、その能力を発揮する場があったのか。これらの史実を明瞭にするため、少々詳しく検討することにしたい。

### ① 朱舜水の日本在住と鍋島直能

上述したように、朱舜水は明の回復のため長年、清に対抗する戦いに参加したが、鄭成功が率いた北征が失敗した直後、長崎に来航した。しかし、当時の日本では、来日した外国人は非常に厳しく管理されており、外国人の長期滞在はなかなか許可されず、外国人は国外に退去させられていた。朱舜水自身も当時の状況についてしばしば触れている。

……弟飄流無已時、近亦留住日本。日本國之禁、三十餘年不留唐人、留弟乃異數也。…  
…<sup>(12)</sup>

大意は、私が長崎に到着した時、日本では既に三十年余り中国人の在留を許しておらず、私の日本在住が許されたのは真に例外である。

留住唐人既數十年未有之典、而近日功令更加嚴切。欲留一人、比之登龍虎之榜、占甲乙之科、其難十倍。……<sup>(13)</sup>

内容は、中国人が日本に滞在できたことは既に数十年ないことであり、最近はその法令はより一層厳しくなっている。ひとりを滞在させようとするだけでさえ、英雄豪傑の立て札に名が記されるよりも、科挙において甲乙両科に及第するよりも十倍以上難しい。

中国人が在留許可を受けることが極めて難しい状況の中、朱舜水の日本在住は長崎鎮巡黒川丹波守の建議により、小城藩主鍋島直能の同意を得ることによって、はじめて許されたものであった<sup>(14)</sup>。朱舜水は鍋島直能に与える書の中で、「昨年果蒙破格留止、慰藉加隆」、すなわち、昨年は先例のない特別な御計らいを受けて在留が認められ、精神的にたいへん慰められたと、感謝の気持ちを表している<sup>(15)</sup>。

来日中国人の対応に関連して、朱舜水より六年先に日本に来航した僧侶隠元隆琦が、承応三年七月五日に長崎に到着した際、直能の父であり、時の小城藩主であった鍋島元茂は直ちに隠元に書を送り、歓迎の意を表した。隠元隆琦も「復鍋島紀伊守」という返書を送り、その中で、元茂の誠意に対し、「知人重道隆礼尊賢」と高く評している<sup>(16)</sup>。翌八月には、直能も隠元に書を送っている<sup>(17)</sup>。幕府が外国に対して保守的な政策をとってから、ま

(12) 「與陳遵之書」、朱舜水著、朱謙之整理『朱舜水集』上、中華書局、1981年、43頁。

(13) 「答魏九使書」、『朱舜水集』上、49頁。

(14) 『朱舜水』、103頁。

(15) 「與鍋島直能書三首」三、『朱舜水集』上、70頁—71頁。

(16) 「元茂公御年譜」十、承応三年の項。

(17) 「直能公御年譜」二、承応三年の項。

だ十数年しか経っておらず、外国人に対する取り締まりが非常に厳しい状況においてとられたこのような振る舞いから、鍋島元茂・直能父子が中国の人と文物に向けた温かい眼差しと真摯な態度を十分に読み取ることができる。かような気構えこそが、下川三省を朱舜水の身辺に遣わし、本格的な漢学・漢語を学ばせることを可能にしたのであろう。

## ② 三省が朱舜水の弟子となる

下川三省は寛文四年（1664年）冬、鍋島直能の命令により長崎の朱舜水の門下生として派遣された。朱舜水は寛文五年春、鍋島直能に与える書に、三省の入門について詳細に記している。

去冬承命以下川三省見委，此子温厚淳謹，僕望其大有所成，此爲下僚之子，而臺下能知其可教，……其父力薄，不能教其子，而臺下事事爲之經營，且使其俯仰無虞，得以專志於學，是臺下之仁也。世誠不乏英才，但未有仁明之君如臺下者，故多棄之泥塗之中耳。<sup>(18)</sup>

この書は、朱舜水が水戸藩邸へ赴く年に書いたもので、すなわち寛文五年春の作である。舜水は直能から三省を教育するように依頼され、三省に会った。舜水の三省に対する印象は「温厚淳謹」であり、舜水は三省がきっと大いにその能力を伸ばしていくと予見し、彼に大きな期待を寄せている。三省は下僚の子であるが、直能は彼の才能を見出し、教育によりその才能が大きく開化することを見通している、と舜水は直能の先見の明に感心している。

三省の父親にはあまり力がなく、三省を教育することはできないが、直能が三省の面倒をすべてみている。それゆえ、三省は全く心配することなく、学業に専念することができる。これは直能の仁徳である。

続けて、世の中に才能のある人は少なくないが、直能のように仁徳があり、先見力がある君主がないため、それらの才能の殆んどが埋没してしまっている、と舜水は直能が三省の教育を温かく見守り、支援する姿を大いに賞賛している。

三省が朱舜水の門をはじめて叩いた時の様子もつぶさに記録されている。

初六日，加賀守遣來一童子拜於門下，就此學問，看此童氣宇頗沈靜，頗似可教。姓名下川三省，已讀《四書》、《五經》、《文選》、《左傳》、《三體詩》、《山谷集》，大約不是說謊。云能作詩，亦未嘗試。……<sup>(19)</sup>

これは朱舜水が安東省庵に書いた文章の一節であり、加賀守とは鍋島直能の官途名である<sup>(20)</sup>。直能に遣わされた三省は朱舜水の目の前に現れた。朱舜水は三省を「童子」（男の

(18) 「與鍋島直能書三首」一、『朱舜水集』上，69頁。

(19) 「朱舜水寄安東省菴書」，徐興慶編著『新訂朱舜水集補遺』，國立臺灣大學出版中心，2004年，265頁。

(20) 当時は官途名をつけるのが通例であった。「此頃迄ハ，御部屋住ニ而何の守と御名付候例有之，…慶安四年ニ加賀守直能と相済候也」，「元茂公御年譜」十，慶安二年の項。

子)と表現しているから、彼の年齢は多めに見積もっても、十代半ばであろう。三省は漢学について全くの初心者ではなく、基礎的な学習をしてきており、詩を作ることもできると書いている。作詩について確かめてはいないものの、三省が言ったことが嘘ではないと舜水は感じ取った。この文面から推測すれば、質問に対する三省の答えを含め、初対面の三省に対する舜水の印象は良かった。

なお、まだ十代の少年である三省が、小城藩の地にあつて既に「四書」・「五経」・『文選』などを学んでいたという記述は真に興味深い。小城藩の教育はどのように展開されていたのか。三省はどこで誰について漢学を学んでいたのか。これらの事柄を明確にするには、さらに時間をかけて丁寧に研究調査する必要があるが、少なくとも現時点で、次の二点は明白である。一つは、小城藩では漢学に関する教育が既に展開されていたこと。もう一つは、直能が漢学について一定の知識をもつ三省を朱舜水に学ばせたことは熟考した上でのことであり、計画的・本格的に三省に漢学・漢語を習熟させようとしていたこと。

鷺峰が三省にあったのは寛文七年夏であり、三省が朱舜水について勉強を始めてから既に二年半が経っている。舜水は三省に対して厳格に教え、三省もまた大層努力したようである。三省は朱舜水について学問と生きた漢語に習熟し、後にその学識と語学力をもって、師朱舜水が亡くなった後、徳川光圀がその後任者を選任する際に、大いに活躍した<sup>(21)</sup>。

## 2 五十川剛伯の中国音読を聞く

### (1) 鷺峰と五十川剛伯の出会い

林鷺峰が加賀藩士五十川剛伯と初めて会ったのは下川三省の中国音読を聞いた一年後のことであり、寛文八年(1668年)八月のことであった。

八月六日夕方、五十川剛伯は林鷺峰が編史を行っていた国史館を訪れた。そして、自分は五十川梅庵の子であると自己紹介した。鷺峰は旧友の梅庵に子があることは知っていたが、会うのは今回が初めてであった。その詳細について鷺峰は日記に次のように記している。

薄暮五十川剛伯來、自稱曰、梅安(庵)子也、余素聞梅安有子、然未知其面、曾與春泰相知、故相見相悅、剛伯談曰、依加賀羽林之召、去月上旬出洛赴加賀、而以木下順安(庵、下同)先容謁羽林、受其祿且承命而來江府、爲見朱之瑜學中華語音又問文筆之事也、是羽林在府時與水戸相公所約、而奧村因幡與朱之瑜執交故也、順安寄書亦云爾、彼父梅安求仕加州而不遂、然其子反(及)此者幸也、<sup>(22)</sup>

五十川剛伯は京都の出身であり、父五十川梅庵は林鷺峰の友人であった。剛伯自身も、鷺峰の親戚であり弟子でもある林春泰と以前から交流があり、それゆえ今回の再会を二人とも喜んでいた。剛伯は加賀藩主前田綱紀の召致により、先月上旬に京都から加賀に赴き、木下順庵の意見に従って、まず藩主の前田綱紀に参謁して藩士となり、この度、藩主前田綱紀の命令により朱舜水について中国語と文章を習うために江戸に来た。これは前田綱紀

(21) 『徳川光圀』、194頁。

(22) 林鷺峰著、山本武夫校訂『国史館日録』第三、続群書類従完成会、1998年、寛文八年八月六日の項、163頁。

が江戸にいた時、既に水戸藩主（徳川光圀）と約束したことであり、加賀藩家老の奥村因幡（庸礼）も朱舜水との交誼が長かったことによる。また、木下順庵も手紙で、剛伯の父である梅庵も加賀藩に仕えることを願ったが、それは実現されなかったこともあり、息子の剛伯が加賀藩に職を得ることができたのは喜ばしいことだ、と書いている。

鶯峰の日記により、次の数点が明らかにされた。すなわち、

- (1) 加賀藩士を朱舜水につけて中国の言語と文事を学ばせる計画は、藩主前田綱紀自身の着想であった。
- (2) 前田綱紀は加賀藩の人材を、水戸藩の客である朱舜水のもとで学ばせる計画を順調に運ぶために、綿密な準備を進め、事前に水戸藩主である徳川光圀と相談し、その許可を得ていた。
- (3) 水戸藩の同意を得た上で、派遣する人選を選ぶ段階において、木下順庵に推薦してもらった。
- (4) 五十川剛伯はこの計画を実施するために加賀藩に選ばれ、藩士となり、それゆえ、彼の江戸行の目的は朱舜水に入門することであった。
- (5) 五十川剛伯は木下順庵の推薦により加賀藩に仕えることになった。
- (6) 五十川剛伯の父、五十川梅庵は鶯峰の友人であり、また剛伯自身も林春泰の友人である。
- (7) 加賀藩の家老、奥村庸礼は朱舜水との交流が深い。
- (8) 鶯峰は加賀藩の儒者木下順庵と交流している<sup>(23)</sup>。

林鶯峰が初めて五十川剛伯に会ったのは、この時であるが、鶯峰と剛伯の家族同士の付き合いは三世代の長きにわたるものである。剛伯の祖父は、鶯峰の父である羅山の少年時代の友人であり、剛伯の父である梅庵とその兄は、また鶯峰の少年時代からの友人であった。剛伯が江戸に来るのに先立ち、同年二月に父の梅庵は鶯峰を訪問し、二人は十三年ぶり再会し、懐かしく旧事を回想していた。梅庵は京都の医者であり、この度の江戸来訪の目的は膠漆の親友である木下順庵が仕える加賀藩に仕官することであった。老中や幕僚に広い人脈をもつ鶯峰は梅庵のためにすぐ加賀藩邸を訪れ、家老の奥村庸礼に梅庵の件を頼んだが、他の藩に先駆けて学問・文芸に力を入れていた百万石の加賀藩においてさえ、学者の任用はそう簡単ではなく、結局、梅庵の願いは叶わなかった<sup>(24)</sup>。それゆえ、木下順庵が書信の中で、剛伯が朱舜水に中国の言語と文事を習うために加賀藩で職を得た幸運を祝い、喜んだのである。

五十川梅庵・剛伯父子が加賀藩に職を求めた過程を見れば、武断政治から文治政治への転換期にあたる寛文年間に学者たちが職を求める難しさを窺知するに足りるであろう。

当時の世態について鶯峰は寛文七年七月の日記に次のように記している。

……與卜幽・友元打話而至夜闌，幽談曰，頃聞街説，曰，國史館通鑑編修，徒費年月，眞は無用之甚，無過於此，乃是盲聾之徒，雖不足論，世俗無知至此，痛哉，有心者可切齒也，余笑曰，……今世悉是於文字則盲聾也，彼見猿樂，翫茶器，以碁・象戲，爲至樂，自我輩見之則以爲人面畜心，彼等以文字爲無用者，不足驚焉，我自我，彼自彼，

(23) 鶯峰と順庵との交流については、寛文七年十一月十六日、順庵から鶯峰に書信を与えた後、両者の往来が『国史館日録』に見えるようになった。

(24) 『国史館日録』第三、寛文八年二月十八日の項、42頁。

別是一天地之人也，……<sup>(25)</sup>

この文面から、街中の人々の文事一般に対する無理解と無知をよく読みとることができ、そのような世情に対して、鶯峰は呆れて嘆いている。

かような状況の中、前田綱紀は中国の言語と文事を習わせるために五十川剛伯を朱舜水のもとに派遣したのである。

## (2) 中国音読の披露

林鶯峰は五十川剛伯が訪ねてきた四日後、剛伯に詩を贈り、剛伯の生活状況について尋ね、それに合わせて、「越前紙・長門紙」を贈った。鶯峰にとっては、剛伯とは初めて会うにしても、「然通家三世之好不可踈焉」であり、剛伯の面倒をみるべきだと考えているようである<sup>(26)</sup>。一方、剛伯も鶯峰の厚意に直ちに反応し、翌日に鶯峰の詩に応じて作った詩を鶯峰に届けた。鶯峰は剛伯の詩について「不爲拙也」と評している<sup>(27)</sup>。

それから十数日後、剛伯は鶯峰を訪ねた際に、朱舜水について毎日漢語を勉強し、『小学』を学んでいると鶯峰に報告した<sup>(28)</sup>。

また、木下順庵は、五十川剛伯を朱舜水のもとに送るため、朱舜水に宛てて手紙を書き、剛伯を紹介し、剛伯を厳格に教育するように懇請している。

……夫以先生學純德粹，傳中華之道脉，激東海之儒流，聞風興起者，比比皆是。故寡君遣小生剛伯，執役於左右，之子姓源，氏五十川，剛伯其名，其父幹之黨友也。伏冀夏楚之嚴，陶鎔之化，提撕誘掖，至于有成，則蓋載之鴻造，幹亦可與感恩。<sup>(29)</sup>

朱舜水が木下順庵に送った返書には、剛伯に対する教育について次のように述べている。

……茲遣源氏子就學於弟。事甚尋常，而來教則大爲鄭重。……使其青出於藍，冰寒於水，……獨幸其風度温和，質性馴謹，充之以奮發振興，必不煩于過慮。<sup>(30)</sup>

その大意は、源氏の子を私について学問を学ばせるためにここに遣わされ、事は重大であり、極めて丁重、真面目に教えなければならない。青はこれを藍より出でて藍よりも青し、氷は水これを為して水よりも寒し<sup>(31)</sup>、剛伯を自分（舜水）より優れた人間に成長させてみせる。幸せなことに、剛伯は風格が穏やかであり、資質・本性が素直で慎み深い。鋭意努力し、強い意気込みに満ちていて、彼のことを心配する必要がない。

朱舜水は五十川剛伯が門下生になって間もなく、彼に「論五十川剛伯規」を説き、「師

(25) 『国史館日録』第二，寛文七年七月二十八日の項，150頁。

(26) 『国史館日録』第三，寛文八年八月十日の項，165頁。

(27) 『国史館日録』第三，寛文八年八月十一日の項，166頁。

(28) 「剛伯談日，頃間，毎日就朱舜水習華語，讀小学」、『国史館日録』第三，寛文八年八月二十七日の項，175頁。

(29) 「七五，木下順庵寄朱舜水書」、『新訂朱舜水集補遺』，132頁。

(30) 「答木下貞幹書六首」四、『朱舜水集』上，202頁。

(31) 原文「青，取之于藍，而青于藍；冰，水爲之，而寒于水。」、『荀子』，「勸学」。



弟子事重，不可草草。……至於師弟子，今日一拜之後，更後無遷變。故須審察明白，然後擇吉行禮，萬萬不可苟且造次」と、師と弟子との関係はたいへん重要であり、軽々しくすることができない。今日の一拝礼が終わった後、それから先に師と弟子の関係が変わることはない。それゆえ、このことを分かった上で吉日に礼を行い、決していい加減にはいけない、と筋道立てて師と弟子との関係について教えている<sup>(32)</sup>。

また、朱舜水は奥村庸礼に与える書においても、折に触れて剛伯の学習状況を紹介している。剛伯が舜水のもとに来て三箇月経った時、「源剛伯氣度甚佳，語之稍能領略」，剛伯は語学のセンスに優れており、話しの意味が幾らか分かるようになった、と剛伯を褒めている<sup>(33)</sup>。

それから更に三箇月が経ち、朱舜水について勉強を始めて半年になると、五十川剛伯の学業はより一層進歩した。寛文九年（1669年）二月十六日、剛伯は鷺峰邸を訪ねた際に、彼の中国語を披露した。鷺峰の記録によると、

薄暮五十川剛伯來，……剛伯猶留，以華音誦小學，又作拜揖之體，共所習于舜水，……<sup>(34)</sup>

六箇月の間に剛伯は中国音で『小学』を音読することができるようになった。また、中国式の礼「拜揖」を学んで、いつも授業が終わる時には、師の朱舜水に向かって一礼をしているのであろう。

もちろん、朱舜水が弟子たちに教えているのは漢語ではなく、『小学』といった教育のための典籍であったが、漢語が教授・学習の言語として、また、舜水と弟子たち間のコミュニケーションの言語として使用されたため、その学習空間は漢語の言語環境となっていた。そこで学ぶ者は漢学の内容のみならず、さらに生きた漢語そのものにも習熟することができ、いわば一石二鳥の学習効果がある。加賀藩の文教を振興しようと考えていた前田綱紀は、いち早くこの学習環境に注目し、そのために剛伯を朱舜水のもとに派遣したのは言うまでもない。

『本朝通鑑』（『本朝編年録』より改称）の編修に力を注ぎ、いよいよその完成に向けて総仕上げに取りかかるころであった鷺峰が、極めて多忙な日々を送っていたことは容易に想像されるが、そのような中で、五十川剛伯が中国音で暗誦したことを、わざわざ日記に記していることから、この件がいかに鷺峰の強い関心を引きつける出来事であったかがわかる。

ちなみに、加賀藩から朱舜水のもとに派遣された藩士には、五十川剛伯のほかに、服部其衷もいた。しかし、本稿は林家の生きた漢語に対する意識・姿勢を究明することを目的としており、また、管見の限り林家と服部其衷との関わりを示す史料がないため、本稿では、服部其衷のことを割愛する。

五十川剛伯の文章について、舜水はたいへん褒めている。

(32) 「論五十川剛伯規」、『朱舜水集』下、579頁。

(33) 「答奥村庸礼書十二首」九、『朱舜水集』上、272頁。

(34) 『国史館日録』第三、寛文九年二月十六日の項、262頁。

細閱來章，足爲亢日一喜，纒纒有序，出之不忙不迫，殆樂鍼之所謂整暇者乎？<sup>(35)</sup>

大意は、剛伯が送ってきた文章を読み、誠に嬉しく思う。文章は順序が整然としており、悠揚迫らず、落ち着き払って慌てない様は、まさに樂鍼の「整暇」であろう<sup>(36)</sup>。

五十川剛伯は、朱舜水のもとで習得した生きた漢語と高い文章力が前田綱紀に高く評価され、延宝三年（1675年）、俸禄を三百石に改定され<sup>(37)</sup>、加賀藩儒となり、元禄十一年（1698年）十一月、藩の命令で『學聚文辨』と『助語集要』を編集し、『詩範』一部を撰した。しかし、その子の連累をうけ、翌年五月より流謫された<sup>(38)</sup>。

### Ⅲ 林家の人々と朱舜水との交際

寛文期に林家の人々が生きた漢語・中国音を摂取したという史料は管見の限り見出されていないが、寛文五年の中国人学者朱舜水の江戸在住以来、林家の人々が朱舜水とどのように接してきたか、その軌跡を辿ってみることにしたい。

#### (1) 林梅洞・鳳岡と朱舜水との交流

##### ① 林梅洞・鳳岡の朱舜水訪問

寛文五年七月十一日、朱舜水は徳川光圀の招請をうけて長崎より江戸に到着した。林家の人々は、既に前年の十一月下旬、水戸藩の儒者小宅生順から、朱舜水の事跡および光圀が朱舜水を招請しようと考えていることを聞いており、朱舜水が江戸に来ることを知っていた。朱舜水が江戸に到着して間もない時、林鶯峰の長男林梅洞は朱舜水に詩二首を贈り、一箇月のうちに、朱舜水と四回面会している<sup>(39)</sup>。その際、杜甫と元結の詩に対する朱舜水の考えを尋ね、舜水は自分の意見を述べた。舜水は梅洞の人柄について次のように高く評価している。

其爲人沈潛貞靜，和惠愛人，寬裕亮直，不迫不阿。好揚人善，勤改己愆。孝友誠信，顧行謹言<sup>(40)</sup>。

林鶯峰の次男林鳳岡は九月七日に初めて朱舜水と会った。鶯峰はそれについて以下のよう

七日，……華人朱之瑜今晚到友元宅，常也往而筆談云云，是寓長崎有年，依水戸參議（徳川光圀）之招，去七月來府，余病中不能面談，信也即會於鍋島加牧（直能）及友元宅，常也今夕初逢，以彼近日赴水戸也，……<sup>(41)</sup>

(35) 「答五十川剛伯書三首」二、『朱舜水集』上，340頁。

(36) 「整暇」は中国の成語「好整以暇」の意味であり、樂鍼は人名である。

(37) 林鶯峰著、山本武夫校訂『国史館日録』第五、統群書類従完成会，2005年，延宝三年十二月廿七日の項，206頁。

(38) 「十五，五十川剛伯」、『朱舜水集』下，838頁。

(39) 「勉亭林春信碑銘」、『朱舜水集』下，600頁。

(40) 同前。

文面は、七日の夜、朱舜水が人見友元宅に行く約束があり、春常（鳳岡）もその場に赴き筆談した。朱舜水は長崎に来て数年が経ち、水戸藩主徳川光圀の招請によって去る七月に江戸に到着した。鶯峰自身は病気のために面会することができず、春信（梅洞）も既に鍋島直能と友元の邸宅で舜水に会った。朱舜水は近日中に水戸に行くので、春常はその晩初めて朱舜水に会った、という内容である。

この文面からみれば、長男の梅洞は以前、既に鍋島直能と友元の邸宅で朱舜水に会っており、今回、次男の鳳岡も朱舜水が水戸に行く前に一度会いたかったようである。鶯峰の親友である人見友元や、鶯峰と親密に往来している鍋島直能が既に朱舜水に会っているのに、林家の当主である鶯峰は、まだ朱舜水に会っていない。それは病気という原因によるものであった、という。だが、管見の限り、それ以後も、鶯峰が朱舜水に会った形跡がない。鶯峰が亡くなったのは延宝八年（1680年）五月であり、朱舜水はその二年後の天和二年（1682年）四月に没した。幕臣や学者など大勢の人と交際していた鶯峰が十五年間、同じ江戸にいる朱舜水と会わなかったことは、鶯峰が朱舜水と距離をとっていたように見える。

ちなみに、林梅洞はその六日後の十三日に朱舜水と別れの挨拶をするため水戸屋敷を再び訪ねている<sup>(42)</sup>。

## ② 梅洞の碑銘文にめぐって

林家において積極的に朱舜水と交流した林梅洞が寛文六年九月一日に病没した。二十四歳であった<sup>(43)</sup>。その碑銘文を書いたのは朱舜水であるが、しかし、その文の内容に関して、林家と朱舜水の意見は同一ではなかった。最終的に鶯峰は朱舜水が書いた碑銘文について不満を残したままであった。

……前日朱之瑜所草之碑銘成，其文不愜素聞，建而無益乎，然當時無文人，以外國人故建之則勝於無碑乎，諸門生所議不一，我心亦不決，友元及適其价也，故特及其事，<sup>(44)</sup>

これは鶯峰の寛文七年三月二十日の日記である。すなわち、朱舜水が書いた梅洞の碑銘文ができたが、その内容は始めから変わることなく鶯峰の意に沿わないものであった。それなら、建てても有益ではないと鶯峰は考えたが、しかし当時は文人がいなかったため、朱舜水に頼むほかなく、また碑を建てた方が無碑よりもいいようにも思われた。この件について門生たちの意見は一致せず、鶯峰も心を決めかねて、友元と辻聊適（水戸藩の儒者）のそうする価値があるという意見に従い、鶯峰は朱舜水が書いた碑銘文を用いることを決めた<sup>(45)</sup>。

(41) 林鶯峰著、山本武夫校訂『国史館日録』第一、統群書類従完成会、1997年、寛文五年九月七日の項、122頁。

(42) 『国史館日録』第一、寛文五年九月十三日の項、123頁。

(43) 『国史館日録』第二、27頁。

(44) 『国史館日録』第二、寛文七年三月二十日の項、91頁。

(45) 徳田武「朱舜水の『勉亭林春信碑銘』一件—形式と情緒—」（『近世日中文人交流史の研究』、研文出版、2004年）に梅洞碑銘文に関する研究は詳しい。

## (2) 朱舜水に対する林家の敬遠

林梅洞が亡くなってから、鷺峰や鳳岡と朱舜水との関わりは殆んどなくなっていった。鷺峰の著述や朱舜水的全集を見ても、鷺峰・鳳岡と朱舜水との間に連絡や往来があったという記述が見出すことは難しい。たとえたまたま鷺峰の記録に朱舜水に関係する記事が残されていても、簡単な事実に関する数行の記録に止まり、個人的な考えや意見が形として残されているものは少ない。

寛文七年（1667年）七月十五日に、鷺峰は友人の加藤勿齋と朱舜水との筆語に跋を書いている。

### 筆語跋

我友勿齋藤子默邂逅舜水朱之瑜以毛穎代靦言……瑜明朝儒士避韃亂投化而久住西鄙今客於常山邸者也郷國不同萍水相逢言語異而心緒通實是奇遇之殊奇者也……所問所答共非閑言語之比則是亦席上之一玩乎乃……<sup>(46)</sup>

大意は、我が友人加藤勿齋子默は朱舜水と出会ってから訳士の代わりに毛筆を使い、……之瑜は明の儒者であり、韃靼（清）の戦乱を避けて渡来し、久しく西の片田舎に住み、今は客として水戸藩邸にいる。国が異なり、もともと面識のない人同士が会って、言葉は異なるが心が通じて、これは真に奇遇の中においても殊更珍しい。……筆語中の問答は閑の時の雑談とは次元が異なり、まことに席上においても玩味できよう。

鷺峰の日記には筆語跋の作成について以下のように簡潔に述べられている。

……午刻、跋勿齋舜水筆語後、舜水者明人朱之瑜也、今在水戸邸、其跋勿齋之所求也、<sup>(47)</sup>

二つの文面は、朱舜水について紹介をしているが、それは舜水の経歴に関する紹介に止まり、学識については触れていない。また、この跋文は友人加藤勿齋の求めに応じて書いたものである。とりわけ、「筆語跋」中、国が異なれば言語が通じないことを明言していることは興味深い。

## IV 結びにかえて

ここまでの考察では、主に、生きた漢語の摂取に対する林家の姿勢、中国人学者朱舜水およびその弟子たちとの関わりを中心に検討してきた。また、林家の姿勢をより一層明確に示すため、事例として、(1)下川三省との関わりで、小城藩主鍋島直能の中国の言語・文化に対する姿勢を、(2)五十川剛伯との関わりで、加賀藩主前田綱紀・加賀藩家老奥村庸礼・藩儒木下順庵の生きた漢語に対する姿勢を、対照するために取り上げ、検討を加えた。

(46) 林鷺峰「筆語跋」,『鷺峰文集』巻九十七, 林鷺峰著, 日野龍夫編『鷺峰林学士文集』下, ペリかん社, 1997年, 381頁。

(47) 『国史館日録』第二, 寛文七年七月十五日の項, 141頁。

その中でも、下川三省の事例との関連で検討した小城藩主鍋島直能の場合は、朱舜水の日本定住を許可し、更にそれに先立って、直能の父元茂が隠元隆琦が長崎に到着した際に、いち早く隠元と連絡をとって、隠元と友好的な関係を築いていたことから、後に下川三省を長崎の派遣したことや、三省が朱舜水に入門する前から既に漢学を学習し、一定の基礎を築いていたことは、偶然な出来事ではなく、小城藩における中国の人と文化に対する一貫した姿勢として位置付けることができる。

加賀藩の事例では、生きた漢語に対して敏感に反応した藩主前田綱紀の行動、すなわち朱舜水のもとで語学を学ばせるために改めて五十川剛伯を採用したこと、またそれ以前に、家老の奥村庸礼が既に朱舜水について儒学を学んでおり、舜水と親交があったこと、とりわけ、碩学の藩儒木下順庵が、奥村庸礼と同様、早くも朱舜水と交友していたことなどから、中国の文物を積極的に摂取しようとする加賀藩の姿勢が明確に示され、それが剛伯の中国音読の習得を可能にした要因であった。ちなみに木下順庵は、生きた漢語を積極的に摂取しようとする姿勢を一貫して守っており、五十川剛伯の漢語学習だけでなく、後に木門に入った弟子である雨森芳洲にも生きた漢語を学ばせるために長崎留学を勧めた。

これらの事例と比べ、生きた漢語の摂取、朱舜水との接触などに関して林家が取った姿勢はその対極にあるとまでは言えないとしても、決して積極的なものではなかった。林梅洞はかなり積極的に朱舜水と会い、中国の文事について学ぼうとしたが、林鳳岡と朱舜水との交流に関する記録は梅洞ほど多く存しない。林家の当主である鷲峰は、下川三省と五十川剛伯の中国音読を聞いて、興味を示したものの、実際に中国音読を取り入れようとする気配は見られなかった。

本考察により、林家の生きた漢語の摂取に対する保守的な姿勢を、他者との比較によって浮き彫りすることができた。しかし、なぜ鷲峰が親密に交友している水戸藩の徳川光圀、加賀藩の前田綱紀、小城藩の鍋島直能のような大名たち、あるいは友人である木下順庵や人見友元、それに水戸藩の学者たちとの姿勢に差異があったのかという問いの解明には未だ至っておらず、その究明はこれからの課題としたい。

付記 本論文は千葉商科大学平成22年度学術研究助成金による研究成果である。

## 〔抄 録〕

本稿は、林家塾が大いに発展した寛文年間（1661年—1673年）を取り上げ、第二代当主林鶯峰をはじめとする林家の人々が、朱舜水および彼が話す生きた漢語に対してとった姿勢を浮き彫りにするため、それと対照をなす林家周辺の漢学者や好学の大名が、朱舜水および生きた漢語に対して示した反応について論じたものである。事例として、下川三省との関わりで、小城藩主鍋島直能の中国の言語・文化に対する姿勢について、五十川剛伯との関わりで、加賀藩主前田綱紀・加賀藩家老奥村庸礼・藩儒木下順庵の生きた漢語に対する姿勢について考察した。これらの事例との比較により、生きた漢語の摂取、朱舜水との接触に関して林家が取った姿勢が決して積極的なものでなく、むしろ保守的なものであったことが明らかになった。